

生田に宿す

菅

茶山

千歳恩讐両つながら存せず

風雲長為忠魂を弔う

客窓一夜松籟を聴く

月暗し楠公墓畔の村

【作者】菅 茶山(一七四八〜一八二七年)。名は晋帥(しんすい)、字は礼卿(れいけい)、通称を太仲(たいちゆう)と称し

茶山(さざん)ちやざんともいう)はその号。寛延(かんえん)元年、備後神辺(びん)こかなべ。今の広島県深安郡)に生まれる。

京都に遊学し、のち故郷神辺に塾をひらき廉塾(れんじゆく)といい、住居を黄葉夕陽村舎(こうようせきようそんしゃ)と名づる。

詩名高く子弟多し、文政(ぶんせい)十年八月 八十歳にて没す。著書に黄葉夕陽村舎詩前後編、その他多数ある。

【語釈】*生 田:今の神戸市生田区現中央区)その西に楠正成戦死の古戦場 湊川がある

*恩 讐:恩とあだ 味方と敵(こ)こでは南朝と北朝をさす *弔忠魂:忠義の人 楠正成の魂をなぐさめる

*松 籟:松風の音:墓畔村:(楠正成の墓のほとりの村

【通釈】千年を経た今では、かつて南朝と北朝とが戦った恩讐はもはや消えてしまつて、ただ風や雲ばかりがこの地を訪れ、永久に

楠公の忠魂を弔っているかのように見える。私は旅の一夜をこの生田に過(こ)し、松風の音に耳を傾けながら昔をしのんだ。

眠れぬままに窓の外を見ると、月もほのぐらく、楠公の墓のあるこの村は、なんとも寂しい限りであった。